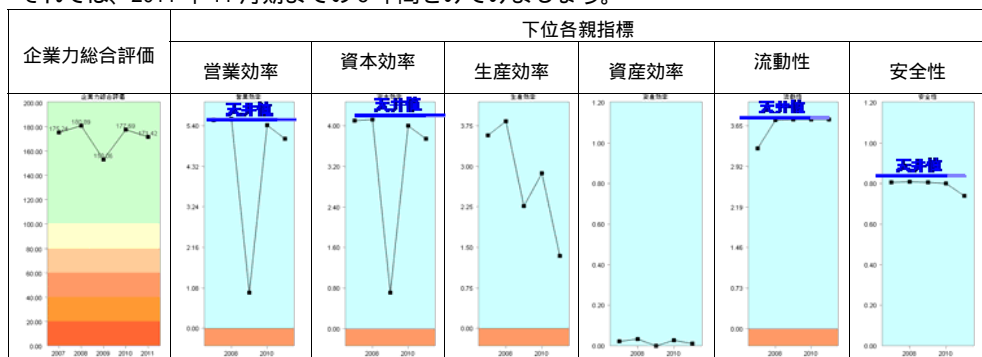


今回はテクノアルファ株式会社を分析してみました。テクノアルファ(株)は、パワー半導体の製造装置を主として、海外の装置・電子材料を輸入販売する商社です。2009 年 5 月に(株)コムテック(注 1)を子会社化、2011 年 12 月に吸収合併しました。また、2011 年 9 月に(株)ペリテック(注 2)を子会社化しました。M & Aを行なって、メーカー機能を持つ技術専門商社を目指している会社です。

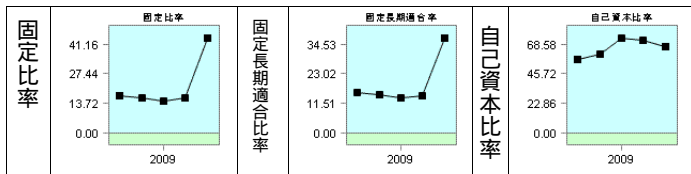
(注 1) LCD 関連光学フィルム等の電子材料、機器輸出を行う会社

(注 2) NI LabView (優れた開発環境) による計測検査システムを開発する会社

それでは、2011 年 11 月期までの 5 年間でみてみましょう。



- ・企業力総合評価は 175.24 180.89 153.06 177.69 171.42 と高い評価で推移しています。2009 年リーマンショックの影響でかなり下落しましたが、すぐに回復しました。
- ・営業効率 (儲かるか) と資本効率 (資本の利用度) は天井値にありましたが、リーマンショック以降、少し悪化傾向があります。しかし、営業効率の天井値から落ちてくる過程で M & A をしています。それが企業力を高める好機であるとの経営感覚を持っているのでしょう。
- ・生産効率 (人の利用度) は反転しながら悪化トレンドです。従業員数は 28 人 28 人 33 人 35 人 62 人と推移しており、1 人当り売上が悪化しています。リーマンショックの痛手が癒えないときでも、攻めの姿勢を貫いて社員を増やしています。
- ・資産効率 (資産の利用度) は青信号領域で良いようです。商社なので、工場などの大きな設備投資がいらないからでしょう。
- ・流動性 (短期資金繰り) は天井値です。1 年以内に返済する負債が 4.7 億に対し、現金預金が 6.7 億ありますから、支払いには全く困りません。
- ・安全性 (長期資金繰り) は、天井値でしたが、2011 年悪化し始めました。これは固定資産が 2.3 億から 6.6 億へと急増したためですが、固定比率が 100% を大きく下回っていて問題ないでしょう。



では、営業効率を詳しく見ていきます。

単位:千円・%

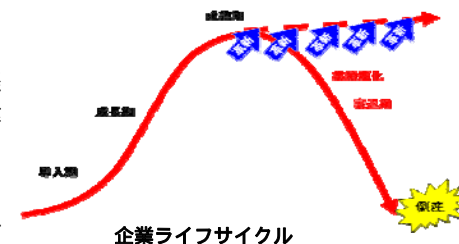
	2007	2008	2009	2010	2011
売上高合計	2,850,959	3,311,690	1,790,272	2,705,843	2,550,864
売上総利益	798,737	959,738	553,176	827,536	691,695
売上高総利益率	28.02	28.98	30.90	30.58	27.12
営業利益	295,897	351,420	29,824	225,015	100,318
売上高営業利益率	10.38	10.61	1.67	8.32	3.93
経常利益	302,846	393,585	50,023	258,910	242,389
売上高経常利益率	10.62	11.88	2.79	9.57	9.50
当期利益	176,765	222,573	29,067	130,501	156,826
売上高当期利益率	6.20	6.72	1.62	4.82	6.15

売上高は、リーマンショック以降、以前の数字には戻っていません。売上高総利益率も下がっています。しかし、下がったと言っても 27.12% で、商社としては相当良いと言えます。なぜなら、一般的に卸売業の方が製造業より売上高総利益率は低いと言われますが、たとえば京セラ (製造業) で 29.84% ですから比べればわかります。

テクノアルファ(株)の強みはどこにあるのでしょうか。

テクノアルファ(株)はもともと、利益率重視の経営姿勢で、商社であっても高い売上高総利益率を維持しています。

さらに 2011 年 9 月にペリテックを子会社にしました。製造業を子会社にして、高い利益率を狙っています。



企業のライフサイクルについて考えます。一般的に企業は上図のような曲線をたどります。導入期、成長期、成熟期を過ぎ、そのままにしておくと衰退期に入ります。成熟期の末期までに、次の成長のための革新を起こさないと衰退していきます。新しい商品やサービス、新市場の開拓をしていなくてはなりません。そこで使われるのが M & A です。ゼロからスタートするのではなく、今まで蓄えた資金をもとに、時間を短縮しながら革新を起こします。このようにして企業ライフサイクルを長期化させるのです。

テクノアルファ(株)の強さの源は、利益率重視の経営姿勢と、企業ライフサイクルの見極めが秀れていることでしょう。

### まとめ

高い利益率を確保する方法は、足し算もあり、引き算もあります。そして革新のタイミングと決断が重要だということですね。